

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における 関係主義から実体主義への移行

From relationalism to substantiveism in *Nadja* of André BRETON

加藤 彰彦
Akihiko KATO

【要旨】

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』の第三部の存在という構成上の問題を解明するために、ブルーストの『失われた時を求めて』の第一篇「スワン家の方へ」における第三部「様々な土地の名・名前というもの」の『ナジャ』との構成上の類似を指摘した上で、本論考の第一部においては「ナジャの物語」の中のナジャの存在を関係主義的に捉えることで明らかにしつつ、同時に関係主義の捉え方の問題点を指摘した上で、第二部では『ナジャ』の第三部があることで、ナジャの存在は一転して関係主義から実体主義へ移行して捉えることの必要性を、関係主義を標榜する哲学の問題点を指摘しつつ明らかにした。

【キーワード】

アンドレ・ブルトン 『ナジャ』 関係主義 実体主義

序章

1928年にガリマール書店から初版が刊行されたアンドレ・ブルトンの『ナジャ』は、34年後の1962年に「遅れた至急便」と題する「序言」を付け加え、表現を改めるとともに、脚注を加え、添付された写真図版を入れ変えるなど手を加えているが、大きな内容の変更はない。この改訂版に付け加えられた「序言」を除けば、『ナジャ』の本体はその内容や記述の方法から大きく三部に分けて捉えることができ、その第二部にあたるものがいわゆる「ナジャの物語」である。

『ナジャ』は当初からこの形で発表されていたのではなく、部分的に雑誌掲載という形で発表されている。一つは『コメルス』誌の1927年秋号に「ナジャ / 第一部」と題してプロローグ全てが、次に『シュルレアリスム革命』誌11号において「ナジャ (断片)」という題で1926年10月6日の話がかかれている。これらは「ナジャの物語」の中でも核心的な部分であり、発表の必要性は十分考えられる。

そしてこれらを中心に加筆し物語として完成させたものが「ナジャの物語」であり、『ナジャ』とは本来この「ナジャの物語」であるはずのものであった。ところが実際に『ナジャ』として刊行されたものには「ナジャの物語」に先行する形で第一部があり、また「ナジャの物語」に続いて第三部も書かれることになる。

考えてみれば、第一部は「ナジャの物語」の位置付けを明らかにするために必要だったということは言える。つまりナジャとの出会いという出来事は単なる恋愛に類するものではなく、

ブルトンが既に体験してきているシュルレアリスム的な出来事の流れに沿うものだという事であり、更に言うなら、『ナジャ』の冒頭に書かれている「私は誰か。」(PI p.647)¹⁾という問いかけに答えるものとして「ナジャの物語」が用意されていると考えるなら、その構成も首肯し得るところがある。

ところが問題は第三部なのだ。「ナジャの物語」が終わった時点で『ナジャ』も完成するといふのであれば、構成上きれいにまとまっているという印象があるにも拘らず、何故か付け足しのように第三部が書かれることになるのだ。

実際ブルトンは第三部を次のように書き始めるのだ。「私はうらやむ(これは一つの言い方なのだ)一冊の書物のような物を準備する時間があり、それをやり遂げた時に、その物の運命とかとにかくこの物全てが彼にもたらす運命に興味を持つ方法を見出している全ての人を。途中で少なくともそれを諦める本当の機会が彼に生じたということを私に信じさせてくれないだろうか!」(PI p.744)

ブルトンは『ナジャ』を終わらせることに苦慮していたわけだが、この『ナジャ』と構成上似た展開を持つものがあり、それはブルーストの『失われた時を求めて』の第一篇『スワン家の方へ』なのである。この『スワン家の方へ』は、ブルーストの作品の中で注目される無意志的記憶、マルタンヴィルの鐘楼について書かれていて、実際ブルーストの予定では、現在『失われた時を求めて』として捉えている長大な作品群ではなくもう少し規模の小さめのものだったようである。

この『スワン家の方へ』は三つに分かれていて、第一部が「コンブレ」、第二部が「スワンの恋」、そして第三部が「様々な土地の名・名前というもの」となっている。もちろん『ナジャ』とこの『スワン家の方へ』が類似しているという話ではなく、『スワン家の方へ』の第三部のあり方が『ナジャ』の第三部のあり方を想起させるところがあるのだ。当初我々は『ナジャ』の終わらせ方に苦慮したブルトンが、この『スワン家の方へ』の第三部にヒントを得たのではないかと思った程だ。ただこれはかなりの憶測にすぎないもので、立証することは不可能である。

このような憶測をもたらしたのは、アンリ・ベアールの『アンドレ・ブルトン』によると、ブルトンは当時定職がなく、ヴァレリーに提供されたブルーストの原稿を読むという仕事を引き受けていたことによる。

ベアールは次のように書いている。「初めは、少なくとも、事務的な仕事が彼には都合がいい。ブルーストの家での朗読の仕事は彼によい思い出を残すだろう。(中略)彼の手書きの原稿は判読するのが難しい加筆や貼り付けた紙で一杯だ。ブルトンはそれをよく響く声で読む。小説嫌いの彼は、彼が構想中のこの作品の中に巨大な隠喩のようなものを見出している詩的な宝庫をそれでも高く評価するのだ。彼は花咲く乙女たちの一人の息子であるスーポーによって、『リテラチュール』誌への協力をブルーストに依頼させることさえするだろう。」(AB p.116)

つまりブルトンとブルーストとは全く無関係というわけではないのだ。またブルトンが原稿の校正をしたという『花咲く乙女たちのかげに』は、『スワン家の方へ』に続く第二篇であるのだから、ブルトンが『スワン家の方へ』を読んでいたということにはならないが、可能性はありそうだということだ。また時期を考えると、『スワン家の方へ』が刊行されたのが1913年で

あるから、1926年刊行の『ナジャ』については充分時間的な余裕があるとともに、同時代的という捉え方もできるだろう。

そしてこれが肝心なことなのだが、プールの『失われた時を求めて』はこれ以降も続く巨大な小説であるにも拘らず、プールはこの『スワン家の方へ』をとりあえずは終わらせなければならなかったという事情がある。そのためにプールは何をしたか。プールは「様々な土地の名・名前というもの」の最後で、失われた時の強いノスタルジーを感じさせる記述を展開するのである。つまり物語の円環構造を成立させているのである。

実際ブルトンは「ナジャの物語」を現在形で語り始めるのであるから、「ナジャの物語」においても円環的になっているのは容易に理解できることである。この円環とはつまり時間のふくらみということであって、何も終点が新たな始点としてそのまま成立するというわけではないのだ。それは『ナジャ』の第三部において、ブルトンが一冊の書物を完成させることの苦慮を明らかにした後、「私はこの物語が導くことのある場所のいくつかを再び訪れることから始めた。」(PI p.746)と書くに至るのであるが、テキストにおいては行を空け点線が付されているのだ。

この時間の転換とは現実が記憶に変わることを意味するのであって、例えばプールは「様々な土地の名・名前というもの」の最後において、次のように書くのだ。「私がおの様子を知っていた現実是最早存在していなかった。アカシアの並木道が別のものになってしまうためには、スワン夫人が同じ瞬間に全く同じように現われないということでも十分だった。私たちがおの様子を知った場所は私たちがより安易にそれらを位置付けている空間の世界にしか属しているのではない。それらは当時の私たちの生活を形成していた密接な関係のある印象の代わりに薄い切れ端でしかなかったのだ。あるイメージの思い出とはある瞬間の名残惜しさでしかない。そして家、道路、並木道は、何ということか、時代のように、はかないものである。」(CS pp.419-420)

これと全く同趣旨の内容がブルトンによって『ナジャ』の第三部に書かれている。ブルトンは「ナジャの物語」の舞台となった街を見直すのであるが、「いかなる名残惜しさもなしに、今、私はある街が別のものでなくなり逃げ去っていくのすら見ている。」(PI p.749)

つまりナジャと出会っている時の現実とは、ナジャがいなくなった今となっては最早現実ではあり得ず、記憶の中でしか存在しないというまさにプールの着的着地なのである。

第一部 『ナジャ』における関係主義

第一章 『ナジャ』における読者の存在の必要性

『ナジャ』が円環構造を持っているという時、そこで必要になってくるのは何か。それは読者の存在に他ならない。これは作品が読まれるかどうかということの意味しない。作品が成立するためには、それを書いた作者だけではなく、それを読む読者の存在が必要であるということではない。ブルトンは円環構造となった『ナジャ』を書くことによって、それでもって一旦は終結するのであるが、それが円環構造であるために、読者が再び『ナジャ』を読み直すことを求めるのだ。このことは実際読者が再読するかどうかを意味しない。ただ『ナジャ』を再読で

きるのは読者しかいないということなのである。

このような読者の存在は我々の欲望の発揮と関係があつて、例えば自慢できるようなことをした場合、実際にそうするかどうかは別にして、それを誰かに語って聞かせたいというのがある。黙っているのは何か物足りないという感じがする。そしてこれは自慢話に限らないわけであつて、例えば夢の中の出来事とか不可思議な体験をした時に、それを誰かに語って聞かせたいという欲望が出てくる。

恐らくは語ることによって単なる夢の話や不可思議な体験という現実性に欠けるものを、幾分か現実に近付けておこうということなのだろう。このように欲望の発揮は、対象となっているものを獲得するだけでなく、それを誰かに語って聞かせたいという間主観的關係が成立するということなのである。

「ナジャの物語」において、ブルトンとナジャとが出会う場面を思い出してみればいい。このまさに映画的な場面において、我々はブルトンの視点に立つのでも、ナジャの視点に立つのでもなく、まさに観客として第三者的な視点に立ち、二人の出会いの目撃者となるのである。それはあたかも我々はその街中に同時にいて、我々自身も登場人物となったかのようである。

この第三者性については、ラカンが「盗まれた手紙のゼミナール」において次のように言及している。つまり王妃に宛てられた恐らくは愛人からの手紙がテーブルの上にあり、その意味と利用価値を察知した悪賢い大臣によって盗まれてしまう。この場所には王自身も同席していて、その手紙については意味もわからずに認識している。つまり手紙を巡る攻防として関わってくるのは王妃と大臣だけなのであるが、ここにおいて事情を知らない王の存在が必要となってくるのだ。

『ナジャ』に話を戻せば、ブルトンとナジャの出会いに関して我々は目撃証人として必要なのだ。もちろん二人の本心やどのような展開になるかについては全く無知であるわけだが、それにも拘らず、あるいはそれだからこそ我々の存在は必要なのである。それは何故か。ブルトンがナジャと出会ったことを単なる白昼夢とか幻覚としてではなく、書くことによって我々を共通の認識者として存在せしめ実体化するためである。

これを理解するためには、ヒッチコックの『バルカン超特急』²⁾を思い浮かべればいだろう。ある列車の中で若いイギリス人女性は老婦人と出会うのであるが、この老婦人は突如いなくなってしまう。そこで若い女性は老婦人を探すことになるのだが、誰もそんな人は見なかったと言うし、ひょっとして自分が何か勘違いしているのかもしれないと思うに至るのである。結局老婦人は見つかり、若い女性は自分が間違っていないということになるのだが、ブルトンとナジャは確かに出会ったという目撃証人の役割が我々なのである。

ここで重要になってくるのが、『バルカン超特急』の例で言うなら、老婦人が実際に存在したかどうかという事実の問題ではなく、他の人たちによって証言されることによってしか存在が明らかにならないという点である。もちろんこの作品では老婦人は救出され、確かに老婦人は存在したということが事実によって証明されるのであるが、恐らく現実的なこととして他の人たちによる認識が幅を利かす事態になっているだろう。

『ナジャ』に話を戻すなら、ブルトンは「ナジャの物語」が事実であると我々に認識させるた

めに様々な手法を用いている。写真図版が添えられているというのも一つであるし、記述方法にしてもブルトン曰く「物語のために採用した口調は、医学的、とりわけ神経精神医学的観察のそれをまねている」(PI p.645) というのも、それが事実であるというよりも、我々に事実であると認識して欲しいという願望の現われである。つまり我々は『ナジャ』という作品を読むだけの存在ではなく、そこに書かれていることが事実であるかどうかを判定する立場に立っているということである。従って我々は、主観的であると同時に客観的であることを求められるのだ。

ここにおいて客観性というものは存在せず、あるのは客観性に限りなく近付こうとする共同主観性にすぎないという事実に直面することになる。言葉としては、主観性と客観性があり、客観性の方が真実に近いという捉えられ方をするのであるが、それはあくまで観念上のものであり、具体的にはより多くの人々が納得し得るにかかっている。ところがこれについては容易に反論することができて、共同幻想という言葉があるように、みんな錯覚していたということもあるのだ。

ここでその存在が期待されるのがラカンの言う「大文字の他者」であって、神のような存在ではないにしても、我々を越えたところにある知の保有者という印象がある。もっともラカン自身時期によっては「大文字の他者は存在しない」と言っているし、我々が既に知っているにも拘らず大文字の他者が知らないということもあるのだ。例えば、政治家の汚職について実はみんな知っているのだが、何故逮捕されないかということ、大文字の他者が知らないからだという説明がなされる。

要するに、『ナジャ』の話が事実であるのか、ブルトン自身による虚構であるのかははっきりしないということではあっても、『ナジャ』を成立させるためには、我々が手を貸さなければならないということである。それは何も、ブルトンとナジャの出会いを資料を用いて実証的に裏付けるということを意味しない。確かにこれが完全な作り話であったとすれば、我々は少なからず不快になるに違いない。この点についてはマルグリット・ボネが事実関係を明らかにしている。

問題なのは、『ナジャ』が事実か虚構かではなく、我々がそこに書かれているものに何を見出すかということである。この何かとは真実とは限らない。我々が求めるものは、真実でもっと別のものであるかもしれないのだ。つまりそれが真実ではなかったとしても、そこに何を見たいかということだ。

そしてここにおいて問題となっているのが「ナジャ」という女性であることで、求めるべきものは女性という認識に基づいて探求しなければならない。ラカン曰く「女性は存在しない」ということであるが、これは男性の欲望がなければ女性はその存在理由を失うということから出されたテーゼであるが、同じくラカンが言うように「欲望とは他者の欲望である」とするならば、我々の欲望はブルトンの欲望ともとれるし、あるいはブルトンの欲望は我々の欲望とも言えるのである。

我々は『ナジャ』の読者として、ブルトンとナジャの出会いの目撃証人となるべく、その実在性を明らかにしていかなければならない。つまりそれはブルトン自身ナジャに問いかけてもいるように、「本当のナジャとは誰なのか」(PI p.716) ということであり、ナジャ自身そのことについてどこまで自覚的であったのかが問題となるだろう。

第二章 ブルトンは必ずナジャに会う

既に指摘したように、『ナジャ』が一冊の本として刊行される以前に『ナジャ』の原稿の一部は雑誌掲載されていて、それは「ナジャの物語」として書かれている10月6日の部分なのだ。ブルトンは1926年の10月4日に会っているのであるから、出すなら10月4日の部分だろうと思うのだが、10月4日ではなくて10月6日なのだ。それでは何故10月6日の部分が先に雑誌掲載されることになったのか。それは、ブルトンが以前に遭遇した謎の女性について書かれた「新精神」に言及しているからに他ならない。

具体的にテキストには次のように書かれている。「私がナジャに出会った時彼女は私が貸した『失われた足跡』一冊を手持っているのに気付いた。それは今テーブルの上であり、そして書物の裁断面を見ると、ある幾つかの頁だけが切られていることがわかる。何とまあ、それは「新精神」と題された小文の頁であり、そこではある日、何分かの間隔を置いて、ルイ・アラゴン、アンドレ・ドランそして私によってなされた、驚くほどの出会いが正確に語られているのだ。」(PI p.691)

この謎の女性に対するブルトンの関心は並々ならぬものであったのだが、ナジャ自身も恐らくは、別の意味でこの謎の女性の存在については相当興味を持っていることがわかる。実際テキストには次のように書かれているのだ。「時間が経つことによって希望のないものにしてしまったに違いないというこの追跡の結果が出なかったことに、ナジャはすぐに関心を向けた。この一日の短い出来事の物語が私には注釈なしで済ますことができるように思われたという事実には彼女は驚き失望している。私がそれに与えている正確な意味について自分の考えを説明することを私に急がせるのだ。」(PI p.691)

つまりブルトンが関心を抱いた謎の女性に関連して、自分がどういう立ち位置にいるのかナジャは気にしているのだ。ここにおいてブルトンにとってもナジャにとってもそれぞれ意味は異なるのであるが、謎の女性-ナジャという関係が出来上がるのだ。ナジャにしてみれば、あくまで自分は謎の女性の代替物であり、自分自身として関心を持たれたわけではないのではないかと疑念がある。一方ブルトンにしても初めに謎の女性ありきで、いずれ再会することを考えていたと思われる。

ブルトンは「ナジャの物語」を書き始めるにあたって、「昨年(1925年)の10月4日、全く何もすることがなくて非常に陰気な最近のある午後の終わりに、私はそういう時を過ごす秘訣を持っているので、私はラファイエット通りにいた。」(PI p.683)と書くのであるが、それは以前謎の女性と出会った場所にいればまた再会できるということではないかと我々は考えた。

ところが「新精神」によると、ちなみにここでは謎の女性に出会ったのはブルトン一人ではなく、各自別個に出会う形で、アラゴンやアンドレ・ドランもこの女性に遭遇している。そしてその場所なのだが、アラゴンはボナパルト通りを上がって来た時に見かけ、ブルトンもボナパルト通りを上がって来る途中にすれ違い、ジャコブ通りの少し手前で、他の男性と話をしているのを見ている。そしてアンドレ・ドランはサンジェルマン・デ・プレの格子扉の前で、その女性に出会っている。場所としてはサンジェルマン・デ・プレ境界ということになるのだが、アラゴンとブルトンは、その女性はまたボナパルト通りに戻って来るのではないかと考えていた

し、その後は6区を探し回るとのことまでしている。後日談もなく、その後の詳細は不明であるが、ブルトンがわざわざラファイエット通りに行ったことは、謎の女性との再会を目的にしたとは言い切れない。

またブルトンは『ナジャ』の第一部において自分の所在について、次のように書いている。「さしあたり、人はパリ市内で私に会い、午後の終わり頃、「マタン」誌の印刷所とストラスブール大通りの間で、ボンヌ・ヌヴェル大通りを私が行き来しているのを見ずに三日以上過ぎるということはないと確信することができる。」(PI p.661)

ブルトンがラファイエット通りにやって来たのは、その後の展開から考えれば、謎の女性-ナジャに出会う目的だったと考えられるのであるが、サンジェルマン・デ・プレ界隈ではなく、セーヌ右岸のラファイエット通りにわざわざ来ていたのは何故か。これはパリに限定されているとはいえ、ラカンの「手紙は必ず宛先に届く」に倣って言えば「ブルトンは必ずナジャに出会う」ことになるのである。これはそもそも謎の女性-ナジャが存在し、ブルトンの目の前に現われて出会うことになるということの意味しない。デリダが言っているように、手紙が届かないこともあるのではないかという常識的な反論もわからなくもない。これは信念を強く持てば必ずやかなえられるという希望的観測を述べたものではないのだ。

ブルトンの探し求める謎の女性-ナジャとは現実的に捉えられる女性ではなくて、象徴的構造の中に位置する、いわば大文字の他者と同様である。それでも実際にどのようにして出会うことになるのか。これは正確に言えば錯覚とか誤認ということになるが、謎の女性-ナジャと出会う女性に似た女性があるというのである。

だからこそブルトンは、ナジャとは一体誰なのかと問わなければならない事態に至るのである。ブルトンの遭遇した出来事には運命の働きかけがあって、ブルトンがナジャに出会うように取り計らったというわけである。これは一種の錯覚であって、それがどのような女性であれ運命の女性なのである。

この錯覚の要因はその女性の外見や性格ではなく、その女性と出会った場所つまりパリにいて出会ったということなのである。ブルトンにしてみれば、パリで出会った女性はナジャになる可能性があるということだ。そしてその女性をただの一人の女性ではなく、謎の女性-ナジャに仕立て上げるのである。これはまさに誤認であり、それを信じさせるのは運命の介入があったと考えるためであるが、そもそもそのように考えること自体が、ラカンの言うシニフィアンの恣意性である。

あるものをどのように解釈するかは、その当事者次第なのである。つまりブルトンの言っていることは、メタ言語を形成しているわけではなく、自分がこの世界のあり方に関与しているかを反転する形で世界から受け取るのである。仮に謎の女性-ナジャに出会うことがなければ、ブルトンがそのような設定・枠組みをしたからである。そして当然のことながら、ブルトンは謎の女性-ナジャに出会うことを期待しているわけであるから、期待通りの結末を受け取ることになる。

つまり言い換えるならば、ブルトンは謎の女性-ナジャに出会わなければならないのである。何故なら、謎の女性-ナジャに出会わないとして、ブルトンはそのような現実世界を否定しシ

シュルレアリスムを成立させることになるが、ここにおいてその立場の欺瞞性を指摘するなら、現実世界がつまらなく否定されるものでしかないからこそ、シュルレアリスムが成立することができるということになるからである。つまり、メタ言語は成立しないということである。

謎の女性－ナジャを、この現実には存在しない女性として明言せずともそのように定義したとすれば、シュルレアリスムをメタ言語として成立させようということに他ならない。このことによってシュルレアリスムは独自の象徴的世界を形成しているように思われるが、現実を否定することによって成立しているという現実との共依存関係に目をつむることになる。現実に過大な負荷をかけることによって、象徴的世界のみで生きていこうとすることは、ラカンの言う想像界現実界からの要求を見捨てることであり、いずれ破綻せざるを得ない。現実との関係を考えるならば、ブルトンは謎の女性－ナジャに出会うという運命的な出会いを誤認識しなければならぬのである。

第三章 ナジャはナジャとなることができるか

ブルトンとナジャの出会いが運命的なものであったとしても、少なくともナジャにとっては極めて日常的な出会いの一つにすぎなかったと言える。ところが逢瀬を重ねることによって、ナジャはブルトンの別れたがっている態度を見て別れたくないのだという意思表示をするし、テキスト自体には記載されていないが、後にブルトンに宛てた手紙の中で、ナジャはブルトンなしでは生きていけないことを明らかにし訴えているのだが、ナジャはブルトンの期待するナジャになったかというところではない。

ロッセリーニ監督の『ロベレ将軍』³⁾において、ヴィットリオ・デ・シーカが演じる泥棒詐欺師は、見た目が似ているからということでロベレ将軍になることを強制される。そして次第にその役になり切った泥棒詐欺師はロベレ将軍として銃殺されてしまうことになるのだ。ここにおいて重要であるのは、彼が本当のロベレ将軍であるという必要は全くないということである。つまり問題になっているのは、その男をロベレ将軍として認める他人の眼があるかどうかである。この映画では、外見が似ているからロベレ将軍になることを求められたということであるが、外見が似ているということも必要ではないだろう。

そして更に重要であるのは、他人によって認められるだけではなく、本人もその気になるということであり、ここにおいて象徴的同一化が成立することになる。下手に本当の自分をさらけ出すよりも、社会的に通りのいい仮面を見せておく方が余程有効だということである。このことは対社会に限るものではなく、パスカルが言うように「信じているかのように振る舞え、そうすれば信仰は自然にやってくる」と同様である。本当の自分を探し出すよりは、社会的にも既に認められている仮面をかぶることで、それが本当の自分になるということも十分考えられる。

このように考えるならば、ナジャの行為や態度は適正なものであったと言えるだろうか。ブルトンとナジャの会話において、ナジャはブルトンに自分たちのことを小説として書くことを勧めるし、その会話の内容からすればブルトンがナジャにシュルレアリスムの精神の具現化を求めていることは明らかで、会話にとどまらず、ブルトンはナジャに自らの著作である『シュ

ルレアリスム宣言』と『失われた足跡』を貸しているのであるから、逆に言えば、ナジャがブルトンから何を求められているかはわかって当然ということになるだろう。

ところが10月12日の記述においては、「私は彼女の独り言に付いて行くのに次第に苦勞するようになっていて、長い沈黙が私を言葉に表わせない状態にさせ始めるのだ。」(PI p.713)とあって、ナジャはブルトンと友好的になろうとしているわけでもなさそうだ。考え方によれば、これもシュルレアリスム精神の発揮とナジャは考えているのかもしれない。ところがナジャが別の人物になり切る、その役に徹するという形での偽装ないしは演技があって、例えば10月12日の記述には次のように書かれている。「彼女は非常に一風変わった錯覚を与える程まである瞬間非常に巧みさでメリュジヌの人物を作り上げる。」(PI p.710, p.713)

原文では *Elle compose...* となっていて、この *compose* は「役者が役の人物を作り上げる」という意味で、この変身という偽装についてはナジャも意識的であったということだ。そして12日の夜中、正確には13日の午前1時頃のことなのだが、「その城の前を通りかかった時、ナジャはマダム・ドゥ・シュヴルーズになった自分を想像した。」(PI p.714)

原文では *Nadja s'est vue en Mme de Chevreuse.* となっていて、この *se voir* というのは「自分の姿を想像する」ということなのだが、内的な意識を表現しているわけだ。実状としては、ナジャがマダム・ドゥ・シュヴルーズを気取って見せたということなのか、ブルトンが冗談まじりに、それじゃマダム・ドゥ・シュヴルーズじゃないかと言ったのか、そのあたりではないかと思うが、このあたりは微妙である。少なくともナジャにはブルトンの気に入るように変身しようという意図があったと言えるのであるが、ブルトンにとって望ましいのはナジャがナジャになることであって、別の人物に変身する必要などなかったのだ。

ただこのことから明らかになるのは、ナジャにとって本当の自分は存在せず、ナジャはどの仮面をかぶってそれになり切るかということなのである。この意味でナジャはナジャになり切れていないというか、そもそも他の仮面に手を出している場合ではないのである。ここにおいて問題になってくるのは、この事態にブルトンは自覚的であったかということである。

マルクスの商品分析によるならば、ある商品の価値は別の商品の価値によって表現される。このことは別の商品がなければ当初の商品の価値もなくなってしまうということを意味する。これと同様のことはラカンも言っていて、ある主体の不在は別の記号表現によって代理表現されるのである。しかし商品の価値という場合、価格という表現を用いて、どの商品も表現されることが可能なのであるが、主体の不在はどんな記号表現でも代理表現することが可能とするなら、最初の段階において主体の記号表現はないことになってしまう。この奇妙な事態を打開するために、この関係を逆転させて、主体が全ての記号表現を代理表現することができると考えたのだ。これは商品に対する貨幣の存在と同様である。

このように考えるならナジャを何かによって代理表現することは可能なのだろうか。ナジャが精神に異常をきたした後のブルトンの周囲の反応を見れば、誰一人としてナジャの価値を認めていなかったし、そもそも知らなかったと言える。そのためナジャの存在については、ブルトンの気持ちにかかっているということになる。

それではブルトンはナジャの存在を認めていたのか。可能な限り正確な表現をするなら、ブ

ルトンはナジャの存在を信じようとしたし、信じたかったのであるが、恐らくは信じる事ができなかったということではないかと思う。つまり本心では信じていなかったが、信じているかのように振る舞ったということである。

従ってナジャと別れるにあたってブルトンが失ったものは、ナジャ自身ではなく、ナジャの存在を信じているかのように振る舞っていた行為自体ということだ。つまり象徴的存在としてのナジャを放棄することであって、それによって支配されていた生活からの撤退である。もっとも撤退といっても、そもそもナジャ的なものは存在していなかったのであるから、失ったとしても何もないということになってしまう。

しかし見落としてはならないことは、確かにナジャの存在はこの現実においては他の人たちに認識されもしなかったし、ブルトン自身もその価値を認めるには至らなかった、ところがラカンの言う大文字の他者はこのことを知らなかった、つまりナジャが本当は存在していなかったということを知らなかったことである。それは何故か。ナジャは様々な変身をとげる一風変わった女性であり、何よりもブルトンはナジャのことをシュルレアリスム精神の具現化であるとして振る舞っていたからである。この見かけは実質的ではないのだが、本質的である。そもそもシュルレアリスムは一般に流布している行動原理ではなく、一部の人たちに知られる芸術運動という認識であり、誰もよくわかっていないし、誰もよくわかっていないということもみんなが知っていたにも拘らず、そのようなものとして提示されれば、わけもなく受け入れてしまうということなのである。

ここで忘れてはならないのは、大文字の他者がナジャの不在を知らなかったということであれば、知らないままの状態しておかなければならないということである。大文字の他者にそう信じさせるためには、ナジャの存在を明らかにした書物を書くことであり、ブルトンはそうしたのである。

第四章 関係主義を理解しその問題点を指摘する

ブルトンとナジャの関係、あるいは更に諸々の人たちとの関係を考えるのに参考になるのが、アントニオーニ監督の『欲望』⁴⁾という映画である。これは公開当時難解な映画として捉えられたと思われるが、今見れば、何か教科書的でわかりやすい気がする。この映画で注目すべきは、次のようなことである。

ある写真家が現像室である写真を現像していると、奇妙なものが目に入り、恐らくは死体らしいということがわかる。写真をとった場所はわかっているから、その公園に出向くと、確かに死体はある。ところが翌朝その場所に行ってみると、肝心の死体は消えていたのだ。その帰り道、テニスコートで数人の若者たちがテニスをしているところに遭遇する。それを何気なく見ていたのであるが、奇妙なことにボールがない。ちょうどその時、ないはずのボールが打ちそこなったことによって、テニスコートの外に出てしまい、写真家のところまでころがってくる。そこでテニスをしている若者たちが、すみません、そのボール投げてくださいと頼むのだが、一瞬ためらった後、写真家はテニスコートにそのボールを投げ返す（ふりをし）、若者たちは礼を言って再びテニスに興じるということである。

写真家の一瞬のためらいは当然であるし、ボールって言ったってどこにもないじゃないかと言いつつ言い返すことだって可能だったのだ。誰かが鉄砲を撃つ真似をしたら、撃たれたと大げさに反応して見せるのが乗りのいい対応と見なされるように、ここにあるのは相互主観的な世界である。そうやって世間は成立しているのだということであるし、このゲームに参加しなければ、場合によっては排除されるということになるかもしれない。これが相互理解という次元の話であれば問題はないし、調子を合わせるということの重要性も認識できるわけである。

ただ問題なのは、肝心のボールがないのに物事が成立してしまうということである。テニスにとって必要なのは、ボールだけではなく、テニスコートやプレイヤーの存在、またテニスのラケットも必要ということではあるが、ボールがなければそもそもゲーム自体が成立しないだろうというのが一方の考えとしてある。これはただのゲームなのだからと言ってしまえばそれまでで、テニスをボールなしでやっていたのは、単にふざけていただけだということでは処理できるかもしれない。

ところがこれと同様の事態がもっと深刻な状態で存在し得るのであって、それはカフカの『審判』における裁判である。人間誰しも間違いはあるという話ではなく、そもそも裁判にかけられる元となる事実が存在しないのである。裁判自体は存在し、奇妙であると同時に厳格である。

これと少し趣が異なるが、他の人がどう思っているかが問題になるのが、ラカンの提示した刑務所内において自分のかぶっている帽子の色を当てさせるゲームである。ゲームと言っても、一番最初に正しく自分の帽子の色を当てることが出来れば刑務所から出られるのであるから、単なるゲームとして軽く考えることはできない。用意されているのは白い帽子が3つ、黒い帽子が2つで、対象となっている囚人は3人である。仮に自分以外の二人が黒い帽子をかぶっていれば、自分の帽子は白とわかるから、とにかく一番に外に出なければならない。もう少し複雑になると、自分以外の二人が黒と白の帽子をかぶっていて、仮に自分が黒だとすると白い帽子をかぶっている囚人は直ちに外に出ていくはずであるが、それをしないのは自分の帽子が白だからというものである。

ここに存在するのは、適正な推論とかつ時間である。つまり他の囚人が正しく推測してくれないと、自分の判断も間違ってしまうし、他の囚人の行動を見てからでないと、自分も判断できないからだ。

ここにあるのは他の人がどのように考えているかということではありながら、先程のテニスやカフカの裁判とは違ったところがある。ラカンの囚人の話では、生活や生命がかかっているからいい加減なことではできないということである。この差はどこにあるのか。一方がゲームであり、もう一方が厳正なものであるとする答えは正しくない。また現実においては確実なものは存在しないのであるから、社会を成立させるためにとりあえずの妥協点を形成しておく必要があるという要請があるかないかではない。

確かに決まりのない状況で、それでもみんながゆったりと暮らしていける環境は、相互主観性の成立する好例である。ところが一步間違えば、肝心の事実がないにも拘らず相互主観性が成立している、恐らくは強制的に成立させられている状況は必ずしも好ましいものではない。もちろん事実は事実として独自に成立するというわけではない。マルセル・デュシャンの「便

器」は、本来あるはずのトイレではなく、展覧会に位置させられることによって全く別の意味を持ってくる。シュルレアリスムのコラージュにしても、個々の物ではなく、それが集められることによって構造上の変化が出ることに意味があるのだ。

つまりここにおいて、どのような見取り図によって相互主観性を捉えるかという問題になってくる。『ナジャ』を例にして考えるなら、ブルトンはナジャと出会った10月4日において次のような記述をしている。これはまさにナジャに出会った時のことである。「ためらうことなく私は見知らぬ女性に声をかけるのだが、最悪の事態を覚悟しながら私はそうじゃない方を考えている。彼女は微笑む、しかし非常に神秘的で、そして、何と云うか、その時私は何も信用することができないのだが、よく事情を心得ている（下線原文）というようにだ。」(PI p.685)

この下線を付された部分は、原文では *en connaissance de cause* となっていて、「よく事情を心得て」いるということなのだ。ここにおいて相互主観性が成立していると捉えるのは早計であって、ナジャは街の女として客の男の気持ちはよく理解しているということなのだ。実際ブルトンとナジャが逢瀬を重ねて、ブルトンがナジャと距離を置こうとしていた時の記述は、次のようなものである。「私は、結構随分前から、ナジャと理解し合うのをやめていた。実を言えば、恐らく私たちは一度も理解し合ったことなどなかったのだ、少なくとも生活の単純な事柄を考察する方法については。彼女はそれを全く尊重しないこと、時間の関心を失うこと、彼女が話すことで生じるつまらない話題と私にとってはかなり重要な別の話題との間にいかなる区別もつけないこと、私の一時的な気持ちや私が彼女に対して彼女の最悪の放心状態を許すために私が感じていた多かれ少なかれ大きな困難を全く意に介さないことを彼女はきっぱりと決めていたのだ。」(PI p.735)

ここにおいて相互主観性の成立する余地はないだろう。そもそもブルトンは相互主観性にそれ程重きを置いていたとも思われぬ。それはともすれば偽善的であり、自らその立場をとろうとするなら自己欺瞞が生じることにもなる。自然発生的ならまだしも、誰も信じていないのにみんなそれを信じている振りをするに伴う強制力は、当然のことながら暴力的であるのだ。誰も信じていないことをみんな知っているということで、相互主観性は生じるか。答えは否であって、誰も信じていないということを口に出すことはないわけだし、口に出さないようにしているのだ。

ブルトンはそれよりも「序言」において明らかにしているように、主観性に重きを置いているのだ。相互主観性とは客観性の一歩手前の状態であって、確かに誰かに何かを伝えようとするなら、まずは相手にわかるようにということで、みんなが了解している、誤解の生じる余地がないように配慮しなければならぬのであるが、そこにはブルトンの求める幸福はないのである。ブルトンにとって重要であるのは、「間違いだらけの恋文」(PI p.646)や「綴りの怪しい艶本」(PI p.646)であって、それはまさに欲望の発揮された痕跡というべきものであって、ラカンの言う「象徴界」として捉えられるものなのだ。

第五章 ナジャとはナジャと呼ばれた女性である

『ナジャ』の本体は「私は誰か。」(PI p.647)というブルトンの問いかけで始まるし、「ナジ

ヤの物語」においてもブルトンは「本当のナジャは誰なのか」(PI p.716)という問いかけを行なう。これについてはラカンの鏡像段階理論を持ってくるとも可能だし、既に指摘したようにマルクスの商品分析を応用することもできるだろう。

このマルクスには商品呪物崇拜という概念があって、例えばブランド物について有難がる時、あたかもそのブランド物には特別な属性が備わっていて、それがブランド物を形成しているのだと誤認しているが、それは何も本来それに内在している価値ではなくて、ある種の社会構造によって付与されたものである。

そもそも貨幣にしてからが同じ構造を持っていて、手元にお金があれば何でも買えるように思うが、それはそのお金を他の人が有難がって受け取るということが前提としてある。そしてそれは何もその人がお金に興味があるという話ではなくて、社会のあり方がお金を価値あるものとして見なしているからである。そのため、社会情勢の変化や革命などが起こった時に、それまでは価値のあるものであったお金がたちどころにしてただの紙切れになってしまう⁵⁾。

このような事態は単に貨幣だけの問題ではなくて、マルクスが言うのは、王が王であるのは周囲の人たちがその人物を王と呼ぶからであって、何もその人物に本来的に備わっている即自的な存在はなく、あくまで社会的構造の所産であるということだ。

そしてこのことはラカンによって次のように表現される。つまり、自分のことを王と思っている乞食は狂人であるが、自分のことを王と思っている王も同じように狂人であるというものだ。ここで指摘されているのは、たまたま社会的構造の中である位置を占めることによって王となった者は、自分には本来的に王たる特性があると錯覚しているということである。

それでは次のような場合どのように考えるべきか。よく映画や小説などに出てくる設定であるが、ある身分の高い若者、大体が王子なのであるが、城の中の生活に退屈して、一般庶民の暮らしぶりを見てみたいとか、自分に合った女性を外に出て探し求めるとかいう場合である。自分が王子であることを誇示しては何にもならないから、特に自分が王子だからではなく一人の人間として認めて愛して欲しいという願望を抱いている場合、自分の身分を偽るとか隠すとかいうことになる。そして結局は望みがかなえられないという結末になるのであるが、この幸せな結末において自分が王子であることが明かされても、何か当然の如く受け入れたりするのである。王子であることを知っているのは王子自身と恐らくは側近の者に限られるだろうが、他にも知っている者がいて、それは我々観客であり読者であるのだ。

この予定調和説的な展開が可能になるのは、王子がいくら身分を偽り隠そうとしても、それなりの扱いを受けるという、まさに王子であることを知っている大文字の他者が物語を支えているという印象がある。つまり王子は自らを偽り隠していても、結局王子は王子だったのだという同語反復的な展開が成立するのだ。

何故このようなことが可能になるのか。例えばよく当たると言われる占い師とか、有能とされる精神分析医を考えてみればいい。実際にそうだと言うよりも、この占い師や精神分析医は何でも知っていて当然という、一種の信仰もしくは誤認があるのだ。従っていくら自分を偽り隠していても、幸せな結末が得られるのは、やはり王子は王子であり、将来王になるべく予定されているのだという誤った確信である。

世間に流布している風俗習慣において、自分ではどうすべきかよくわからないし、した方がいいかもよくわからないのであるが、世間の人たちがそうしているからとりあえず世間に従っておくというのがある。この考え方で言うなら、王子であることの根拠について自分は何も知らないのであるが、世間の人たちが王子だと認めているからそうなのだとも無反省的に認めるわけである。だからと言って、王子であることの根拠を確かに持っている他者を見つけ出して、その正当性を主張するというものもない。

『ナジャ』に話を戻すなら、ナジャが何者であるかについて確かに証言している人はいない。ナジャはブルトンと会ったその日から自分の身の上話をするのであるが、それが本当であるという確証はない。またナジャについて語っているそれまで知り合ってきた人たちは、ナジャをナジャとして捉えるのではなく、「レナ」として捉えたり、あるいはナジャ自身が自分はエレースヌであると言ったりするのだ。果たしてナジャをナジャとして認めている人物が存在するのかといった状態であるが、ナジャをナジャとして捉えている他者がいたとして、その存在について検証することはなく、常に先送りされている状態である。

このような状態において、ナジャを信じるということがどのようにして可能になるのか。ここで重要であるのは、神の存在を知った上で信仰が始まるのではなく、信仰があって初めて神の存在が信じられるということであり、ナジャを信じるということのために客観的な根拠は必要ないということである。

ところが逆に、ナジャを否定するような客観的証拠が出てきたらどうするか。信じるということに根拠は必要ないと言っていたが、その場合否定も肯定もないという曖昧な状態であったために、逆に信じることを妨げるものは存在しないということで対応できたのだが、ブルトン自身思い悩んでいたように、つまり「彼女の過去の生活のいくつかの場面について彼女が私にしたあまりにも詳細な話に対してとても不快な暴言でもって反発することが私にはあった、それについて私は、恐らく非常に外見的ではあるが、彼女の尊厳は全く無傷で終わり得なかったと判断していた。」(PI p.716, p.718)

明らかに信じることはできないとする状況になった場合どうするか。ここにおいてもとにかく信じることを前提にすれば十分である。つまり一見信じることをできないとしても、信じる者にとっては全く逆の意味を持ってくる。むしろ信じることで補強されるのである。

また『ナジャ』において特徴的であるのは、ナジャを認識している人物は少なくともテキスト上ではブルトン一人しかいない。従って自分は信じていないが、他の人たちが信じているので、自分も調子を合わせて信じている振りをしているのだということはあるが得ない。『ナジャ』にあるのはブルトンとナジャの二人だけであって、ナジャを認めるかどうかは全てブルトンにかかっていると言っていい。

ここにおいて、ブルトンは自分が信じればナジャが存在するというので、その全能感や自由を満喫することができるが同時に、ブルトンは自分にだけその重荷がかかってくることの負担を考えるならば、『ナジャ』という書物を記すことでナジャを認める他者を存在させる。仮に読者がいなかったとしても、大文字の他者がナジャの存在を知ってくれていると考えることによって、自らを解放することができるのである。

ここにおいて『ナジャ』とはナジャにとっての大文字の他者なのであり、ナジャが認められたとする登録の証しなのである。従ってナジャとは誰かについて明確に答えるのではなく、ナジャとはブルトンや大文字の他者によってナジャと呼びかけられた女性であるということであり、それ以上は何もわからないのである。

第六章 ナジャとはテキストを生産する機械である

推理小説などを考えればわかりやすいが、最初に事件が示され、犯人は誰か動機は何かと知りたくなるということから、テキストは生産されるのである。ブルトンが道を歩いていると、ナジャが現われるのであるが、まさに謎の女性であって、その謎を解くことがブルトンの関心事となり、それがテキストを生産していくというわけである。一風変わったとはいえ、ナジャという女性との出会いの物語は、それだけでは特にどうということはないかもしれない。この一人称で語られる『ナジャ』の特徴は、ブルトン自身がナジャの内面にまで入り込んで、あたかもナジャの内面をそのまま表現するように語ることである。

それが不自然を感じさせないのは、自由間接話法を使っているからであるが、例えば10月5日、ナジャはブルトンが持ってきた『失われた足跡』の中のジャリの詩をたまたま読んだ時のことである。「彼女をうんざりさせるどころか、彼女が最初は結構速く読み、次いで非常に注意深く検討しているこの詩は、彼女を激しく感動させているように思われる。二番目の四行詩の最後で、彼女の眼は濡れ森の光景で一杯になる。彼女はこの森の近くを通る詩人を見て、まるで遠くから彼女は彼に付いて行けるようだ。《いいえ、彼は森の周りを回っているの。彼は入ることはできないし、入ってもいない。》次いで彼女は彼を見失いその見失った地点よりも少し上のところで、彼女を最も驚かせる言葉を探りそれぞれの言葉に彼が要求している厳密な理解と同意の徴しを与えながら、この詩に戻って来る。」(PI p.689)

ブルトンがナジャを観察しそれを記述しているのだと捉えられるのは、最初の部分、ナジャがジャリの詩を読んでいるところである。ところが感動したためにナジャの眼が涙で溢れているというのはわかるにしても、その眼が実際には存在していない森の景色やそこを歩く詩人を見ているとなると、どう捉えるべきなのか。ナジャは今こういうのを幻覚として見ているのだとブルトンに伝えているのか。ところが実際ナジャ自身の言葉として、詩人は森の周囲を巡っているだけで、中には入っていないと明らかにするのだ。

このナジャの言葉の最初は「いいえ」なのであるから、何かが示されることに対しての否定なのだが、自分の話したことの流れで考え違いをしていたというのならまだしも、突然何かに対する否定が出てくるのはいささか奇妙である。もしブルトンの考えていることをいわば推測の形で表現したとしたら、別に話してもいないのに「いいえ」という否定の言葉が出てくるのは更に奇妙である。そして詩人を見失った後は、再びブルトンがナジャを観察した上での表現だと解することができるのである。

となれば、書いているのはブルトンなのであるから、この部分は恐らくはある程度観察した上で、ブルトンが自分の思いを付け加えたものに他ならない。ブルトンにとってナジャは謎の女性なのであるが、検証することによって事実を明らかにしていくというのではなく、ナジャ

の内面に入り込んで自由に語っているのである。

そもそもナジャの本質というものは誰にもわからないのであるから、異論を唱えることもできないのだ。このように他者の内面に入り込んで多少の事実を推測、更には全くの作り話をするということは、ナジャがブルトンの執筆の原動力となるべく供されているということを意味する。ここにおいて本当と嘘の区別はつけられなくなる。単なる思いつきではあっても、それが嘘であるとする確かな根拠はないのである。もちろん本当であるとも言えないのであるが、そもそもそれを判断する根拠も基準もないのである。

恐らくここにあるのはラカンの考える虚像であって、ブルトンはナジャを介して、自らのナジャ像を作り上げるのである。つまりブルトンはナジャをシュルレアリスム精神の具現化だとして、そこから全ての言葉を作り出すのである。このような前提に立つならば、全てはすっきりと理解される。シュルレアリスム的なナジャ像は、ブルトンによる操作の産物なのである。

ナジャとは一つ的人格として捉えられるような人物ではなく、むしろブルトンが『ナジャ』を書くために設定した装置であり、これを通して様々な話を一つの物語として成立するよう役立てられているのである。ここにあるのは錯覚であって、我々は『ナジャ』を読むことによって、ナジャがシュルレアリスム的な存在であると認識するか、あるいはそのような印象を受け取ることになるか、実はそれが前提なのであって、実際に作用している原因はむしろ背後に隠されてしまうことになる。

ラカンに倣って言えば、既にシュルレアリスム的な存在として存在させられてしまっているが、未来完了的な形で、これからシュルレアリスム的な存在が明らかになるであろう何ものかとしてナジャが提示されるわけである。

しかしながら、前提と結論が逆転した物語はいかにして可能か。それは何に基づいているのかが問題となるだろう。それに対する回答はラカンによれば享樂であり、ナジャはまさにラカンの言う「クッションの縫い目」なのである。ナジャとは現実世界とブルトンを縫い合わせる点であり、ブルトンを現実世界から非現実世界へと向かわせる介入点なのである。前提と結論とが逆転するというこの形式上の逆転が、不自然さを感じさせることなく、物語としての有効性を獲得できるのは、シュルレアリスムによって枠付けされているからである。

このシュルレアリスムという枠付けが、前提と結論とが逆転してしまっている形式上の問題を見えなくさせているのである。つまりナジャはつきあってみてよくわかったが、シュルレアリスム的な存在であるというのと、シュルレアリスム的な存在であるナジャが実際我々の眼にはどのように映るかという意味を欠いた命題の混在を消去させてしまうのである。

シュルレアリスムという概念を用いたブルトンによる操作がなければ、ナジャは少し変わったところのある街の女として認識され、我々がその言動に注目することもなかったのである。ナジャがナジャであるためには、ブルトンがナジャのナジャらしさ、ナジャ的なところを信じているというのがまず条件としてあるのは事実である。

従って、ブルトンは何も自己欺瞞的であるわけではないのだ。ただブルトンによるテキスト操作をいわば誤認する形で、ナジャをシュルレアリスム的な存在として捉え、その上でナジャの言動の全てにシュルレアリスムを感じるようになるのだ。つまりナジャを介することによって、

ナジャに関する全ての記号表現はシュルレアリスムを形成するようになる。当初はラカンの言う浮遊するシニフィアンにすぎなかったものが、ナジャというクッションの縫い目が介入してくることによって、シュルレアリスムという統一された領域へと構造化されてしまう。

ナジャという人物についても、いわば開かれた存在であって、ナジャに関しては浮遊するシニフィアンによって構成されている。つまり開かれた存在ということで、予め決定されたものは何もないのだ。ところがクッションの縫い目が介入することによって、シニフィアンの自由な浮遊はなくなり、シュルレアリスムというまとまりによって意味が構造化されるのだ。つまり全ての記号表現は平等であるのだが、ナジャを介することによって、シュルレアリスム的という同一性が決定されるのだ。

このように見てくるならば、最早ナジャがどのような存在であるかは問題にならない。ブルトンのテキスト操作と我々の誤認もしくは錯覚によって、ナジャはシュルレアリスムというシニフィアンを生産することのできる装置として捉えることができるのである。このことによってナジャに対する信頼が揺らぐことはないのであって、それはナジャが絶えずシュルレアリスム的なシニフィアンを生産し続けているということから、共依存の関係にあると言えるのだ。

第七章 『ナジャ』に関するあり得ない設定

「ナジャの物語」は10月4日から12日までの日記形式で書かれた部分で、それ以後ブルトンとナジャは時々は会っていたようだが、ナジャの精神が異常をきたすように、実質的にその関係は終了している。仮にナジャの精神が異常をきたさなければとか、ナジャがブルトンとの関係を維持するために、いささか矛盾する表現だが、意識的に振る舞ったとしたらとかいった設定は無意味である。

ブルトンがナジャについて抱いている幻想が有効に作用し続けるためには、ブルトンの意図に基づくものではなく、内在的な逸脱として機能していることが必要である。つまり他に方法がなかったという状況である。仮にナジャが主体的に行動する女性であればという思考実験をすれば、そのあり得ない状況というものが確認される。そもそもナジャがナジャである必要はないわけであって、他の女性でもナジャの位置に立つことは十分可能である。ブルトンの意識の根底にあるのは、「新精神」に登場する謎の女性であって、ナジャ以外の女性もナジャになった可能性は十分にあるのだ。

従ってナジャについて言えることの一つはその多様性である。謎の女性が占めていた空白を埋めるためにブルトンが必要とした女性は、本来の意味では二次的なもので、いくらでも交換可能なのだ。つまりブルトンが芸術について言及した「模倣の模倣」に倣って言えば、ナジャは謎の女性の模倣であるのだが、他の女性はナジャの模倣であり得たのだ。この謎の女性との距離によって幻想が生じ、ブルトンは『ナジャ』を書くことができるわけである。

そもそもナジャはブルトンの幻想ではないのかという指摘も十分可能であって、研究によって確かにナジャという女性はいたということになっているが、『ナジャ』のテキストで描かれるナジャと実際のナジャとはかなり違っていたということもあり得ない話ではない。この場合ナジャはブルトンの幻想の要因となっているということが言えるだろう。

しかしこうした見方では、テキスト上のナジャと実際のナジャの違いを提示するだけで、ブルトンの幻想がもたらす真実に近づくことはできない。つまり真実を明らかにするために、ナジャ像の歪みを指摘するのではなく、そもそもその幻想が隠しているものに目を向けるべきである。

ブルトンはナジャと一種の恋愛関係を築くのであるが、それがブルトンの現実の生活に何の支障ももたらしていない。この現実世界との距離がシュルレアリスムなのである。実際には様々な問題が生じかねない状況においてそれを退けておいて、現実の社会生活からは降りている、かといってそれは空想上の話として都合の悪いことはなかったことにしてしまうという御都合主義ではなく、むしろそこに生じる距離が実際の生活における可能性の条件として示されているのである。

現実否定とは言っておきながら、シュルレアリスムはただの絵空事、空想の産物というのではなく、現実にとどこまで可能かを明らかにしているのである。シュルレアリスムを掲げるブルトンなら、それとの一体化は当然であろうが、ナジャにとっては自分がそれには一体化しているわけではないという恐らくは自覚がある時、真の効果を発揮するのであり、そのシュルレアリスムの背後には普段の日常生活が存在しているというのが、シュルレアリスムの有効性を示しているのである。

逆説的に言うなら、シュルレアリスムが有効に作用しているのは、いかにも非現実的な領域においてではなく、極めて日常的な領域においてなのである。従って、ブルトンがナジャとの相互理解の欠如に言及した時、それは何もシュルレアリスム的な感覚といったものではなく、「生活の単純な事柄を考察する方法」(PI p.735) だったということに注目しよう。

大事なところは、ブルトンはそれにも拘らずナジャをシュルレアリスム的であるといって評価することである。ここにはブルトンがナジャに対する時と、ナジャがブルトンに対する時の違いがあり、結局のところ二人を永遠に隔ててしまうことになるのは、関係のあり方の違いである。ブルトンはシュルレアリストでありながら、ある種常識人としての振る舞いを見せる。一方ナジャは、社会の最低限の決まりに従いながら、ブルトンとの関係を確実なものにしようとしている。ナジャにとっての問題は、ブルトンの信用を失くすような自分の犯した失敗の本当の理由を誤認しているということである。

ブルトンがナジャに対して求めるのは、シュルレアリスム的と形容し得る逸脱であって、社会的違反ではないのである。ナジャが誤認しているのは、その違いが明確な形で示されていると思うことである。明確な事実としてその区別ができない時、そこにあるものはラカンの言う対象 a である。ナジャが無意識的に振る舞って、ブルトンがそれをシュルレアリスム的であると評する時と、理解不能で、ナジャとは最早関わりたくないと思う時の違いは、紛れもなくブルトンとナジャの違いであって、シュルレアリスムという枠内に限っても、この違いを説明するよくわからないもの、つまり明らかに違いがあることは、実際にブルトンがナジャのことを理解不能と評していることから導き出せるのであるが、果たしてその違いは何かということになると、まさに対象 a の存在が認められるということである。

ここから言えるのは、ブルトンにとって幻想は維持されるべきで、現実の常識ある人物に対

する時のような理解可能性が全面的に示されてはならない。ただその理解不可能性にこれからも対峙していかなければならず、それはいずれ理解することが可能になるであろうという余地があってはならない。ナジャは象徴的秩序のある世界から排除されなくてはならない。

もちろんブルトン自身が実際に強制力を行使したというわけではないが、ここにある排除の原理は、単にナジャの社会的な立場に影響を及ぼすというだけの話ではなく、言説の次元における問題となるのだ。これはまさにフーコー的な権力の問題ともなるだろうが、ブルトンの幻想の維持に貢献するナジャの言葉が、許容されるかされないかによって二分されるのである。許容されればシュルレアリスムという芸術として認められることになる。許容されない場合、嫌悪され拒否されることになるだろう。

ブルトンに幻想を与えるのは、現実にある象徴的な世界を逸脱しているということと、芸術的であるということである。この芸術的という制約は公然と認められたものではなく、芸術を理解する者によって芸術的と認められたといったような同語反復的で、ほとんど意味のないものである。従って、シュルレアリスムの中であって幻想は両義的であるのだが、かといって選択の余地を狭めてしまうことも本意ではないから、いわば偽りの開放性を維持することになる。つまり排除されるようなものも実は受け入れる余地があったのだが、偶然のなせる業でたまたま入ってくるができなかったのだとするのである。

これは「ナジャの物語」の最後におけるナジャについて言えるのであって、ブルトンは実はナジャの言っていることを聞きたくない、聞くことを拒否するのであるが、たまたま聞こえなくなってしまうと主張するわけで、実際ナジャは精神に異常をきたすことによって、ヴォークリューズの精神病院に入れられてしまうのであるが、何もこれはブルトンが自分でしたことではないにしても、たまたまナジャは精神病院に入ることによって、ブルトンの前からも消えそして社会からも排除されることになったということも、ナジャにとって不運な出来事のせいでそうなったと考えるのである。

第二部 『ナジャ』における実体主義

第八章 ナジャのナジャたる部分について

10月4日にブルトンがナジャに出会った時、「ためらうことなく私は見知らぬ女性に声をかけるのだが、最悪の事態を覚悟しながら、私はそうじゃない方を考えている。」(PI p.685)

この状況において、ブルトンがナジャに声をかけないということがあり得たのか。ここにはブルトンの欲望があって、またブルトンがナジャに声をかけるのを禁止されているわけでも、逆に声をかけるのを強制されているわけでもない。仮にここにおいてラカンの欲動を持ってくるなら、どんなにためらったとしてもあるいは拒否したとしても、そうならざるを得ないということで選択の余地はないのだが、ここでは問題にならない。むしろ問題にすべきはそうせざるを得ない状況にあって、自分から進んでそうしたというのではなく、自分にその行為の責任はあるかということである。

この極めてカント的な問題は、例えばカントの「嘘をついてはいけない」という定言命法に対して、実際の必要に迫られて嘘をつくことが必要であるとか、嘘をつく方が他の人のために

なるという場合でも、嘘をつくのはその人の責任になるのかといったことと関わってくる。そしてここまで来ると、人としての本質的な部分と関わることになる。つまりちょっとした行為が親切であるとか意地悪とかいうようなことではなく、恐らくは一生その人に付いて回る本質的な性格といったものも考えられ、それはその人が生きている現在常に既に決定されているわけであり、将来においても変わりなく常に既に決定されているのだ。

実際の日常生活においては自分が決定しているように思われるし、そう捉えても大差ないのであるが、そうするに至ったそもそもの初めというものを考えてみるならば、それは自分が選択したのではなく、他者の選択であり、デリダの言う「私における他者の決断」なのである。例えば、連続殺人犯のような極悪人に対して罪を問うことは当然であるとしても、自分は何も極悪人として生まれてきたくはなかったのだと言えば、それが嘘であれ弁解であれ、それはそうかもしれないと思わせるものがある。

だからといって罪を減じては意味がないから、責任を全て負わせる形で罪に問うということになる。つまり自分は他者によって私という存在の中に投げ込まれたのであって、確かに自分は私の中にいるけれども、それは他者がしたことなのである。それでも私の人生において全ては私自身が決定したと、前提しなければならぬのである。無意識のうちにしたことではあっても、後から自分自身を捉えて、それは私のしたことであると気付くのだ。

ここにあるのはカント的な自己意識であるが、別に物として存在しているわけではなく、ものを考え行動するという主体的なものを必要とするからである。例えば『ナジャ』の10月4日の記述の最後に、次のような箇所がある。「更にしばらくの間私の中で何が彼女を感動させているか私に言うために彼女は私を引き止める。それは私の考え、私の言葉、私の存在の仕方全ての中にあるように思われ、私の人生で最も心を動かされた誉め言葉の一つであって、気取りのなさ（下線原文）なのだ。」(PI p.689)

これはブルトンが自分自身の自己同一性をナジャにおけるブルトン自身の認識のうちに全て反照的に根拠付けている行為なのだが、確かに言われて嬉しいということがあり、それはお世辞でもというよりは、本人は事実そう思っていて、それが他者によって同意を得られるということに満足するのだ。

ところが逆もあるのであって、自分としては不本意な点を指摘され、それは私ではないと拒絶する時、私という主体はどこにあるのか。ラカンがシニフィアンの主体という表現を用いて、これはナジャによってブルトンについて言及された「気取りのなさ」などという意味内容によって、ブルトンという自己同一性が保証されるというものではない。そうではなくて、自分自身を指すことによって、つまり私と言うことで自分自身を指すことによって、その都度何らかのものが生み出されていて、その発話主体が私だということである。従って私は私の身体ではないし、私の内面でもない。この意味において、ラカンの主体はシニフィアンの主体だということである。

ここにおいて問題になるのは、このラカンの言うシニフィアンの主体に実体的なものが認められるかどうかの議論である。つまり私について意味される内容が存在し、結局のところそれが私という統一性を保証してくれるのではないかということである。これはカント的な自己意

識についても言えて、例えば他者は自分に対してどう思っているか、私は反省的にどう捉えるか、また道徳や倫理という社会的規範にどう関わるのか、といったようなことから形成される私らしきものが出てくるのではないかという考えである。

確かに何かの機会に、彼はそんなことをする人ではないという表現が有効に作用することがあって、ここにおいて人物像は実体的に捉えられている。これに対して、これらはあくまで人物的な特徴であって、主体そのものを形成するのではないという指摘もある。確かに何かを選択することについて、そこに私らしさを指摘することも可能かもしれないが、それならばその選択をした人全ての私らしさは共通していることになり、あくまで機械的な反応という程度のものであろう。

問題なのは、他者から何かを強制されて、それを受け入れることは避けたいが、そうも言っていられないとする時の半ば無意識の判断において、無意識の主体が認められるのではないかということである。ラカンの言う「無意識の主体」は意味内容に満ちた主体ではないのだが、他者との関係において自分が何を選択するかという判断をする基準点であることに変わりはないわけで、ここに我々は実体的なものを見出す用意があるということなのだ。

例えば悪い人格を持った者については、悪の素因が彼の本性の一部を形成していて、何かの機会にそれが発揮されるということだ。ところが本人としてはそういうことをしたいと思ってやったのではなく、自分では抑えることのできないものが働いて、意に反してそういうことをしたのだと言う時、その行為の責任を彼に問うのはよくないのか。

ここで神の問題を出さないとすれば、自分では意識して選択したわけではないのに、つまりは原初的にある種の選択をしたことになってしまう。それを意識的ではなく、無意識にしたのだとしても同様である。ここにおいて与えられたとか強制されたという形で本性の一部が常に既に形成されているわけであって、その後自分の選択が始まるのだ。

このように考えるならば、行動の自由というのは認められるのか。たまたま生じた偶然的な出来事なのか、それとも根源的な因果関係を遡及的に導き出すことによって、全ては明らかになると考えるなら、自由などというものはそもそも言葉だけのものなのか。

『ナジャ』について言えば、ブルトンがナジャに出会ったのは偶然と言えるかもしれないが、ブルトンのパリでの時間の過ごし方や、ナジャの街の女としての行動を考えるなら、偶然というよりも時間をかければ必然的なものになるというあたりかもしれない。そして仮に二人が出会った場合のことを考えると、ここにおいて求められるのは本当の私らしさなのか、それとも相手の気に入られることを考えての偽りの私らしさなのか。

私に関する虚実を含めた様々な意味内容は私という主体を形成する可能性があるが、そのうちどれを相手に提示してどれを隠しておくかという判断は、それ以前の、つまりは前提的な私の存在が決断するのであって、このように辿っていくとすれば、空虚なようにいて実体的なものがあると言わざるを得ない。

第九章 ナジャがナジャであるのはナジャだからだ

ブルトンは10月4日から12日までのナジャとの出会いの後、「本当のナジャは誰なのか」(PI

p.716) という問いを投げかけるのであるが、ブルトンによって提示された正反対とも言うべきナジャにも拘らず、ナジャにおける同一性を生み出し保持するものは何なのか。それは、ナジャを形成する様々な浮遊するシニフィアンが拡散するのを防ぎ、それらを一つにまとめ固定する結節点、ラカンの言うクッションの縫い目である。

ナジャに限らず、我々の存在は画一的でもなければ統一的でもない様々な浮遊するシニフィアンによって形成されていて、同一性らしきものを求めるとしても、それは絶えず外に対して開かれていて、その都度新しい要素が入り込むなり、それまであった要素が出て消えてなくなるなりして、一つのものとしては決定されていない。その同一性らしきものは、固定化されない意味作用によって何かのようなものという表現に依存せざるを得ない。ところがラカンの言うクッションの縫い目が介入することによって、シニフィアンの自由な浮遊は止められ、それらは構造化された意味の一部として存在することになるのだ。

例えばナジャを取り巻く浮遊するシニフィアンを、ブルトンの言うシュルレアリスム精神の具現化によってキルティングすれば、ナジャの言葉の一人遊びも「シュルレアリスムの渴望の極致、その最強の限界理念（下線原文）」(PI p.690)として、固定した意味付けを与えられる。

ナジャとは誰かという問いかけにおいて問題となるのが、自由に浮遊するシニフィアンを、どのあたりでクッションの縫い目によって介入させ、同一性を持たせるかということである。例えばブルトンが問題にするのは、ナジャはシュルレアリスム精神の具現化という表現の通り靈感溢れる女性なのか、それとも墮落した街の女なのかという判別である。

ここにおいてナジャに関する相反する要素はナジャの同一性を形成する一部分なのである。ある要素はナジャを巡る要素として別の要素と結ばれていて、全体として遡及的にナジャの同一性を決定するのである。ただしこれが可能になるためには、あるシニフィアンがナジャ全体をキルティングして、それを具現化することによってナジャの同一性を確保しなければならない。ブルトン自身判断に窮しているように、どれか一つの要素が真のナジャだというわけではない。しかしブルトンによって「本当のナジャ」(PI p.716)という表現が示しているように、これらの要素を結合し得るということが、結局のところある一つの要素がナジャの同一性を決定することになると示唆しているわけだ。

その一つの要素はまさに特別な一つの要素として、他の要素の意味付けを決定することになるのだ。もちろんここで決定的な役割を担うのはシュルレアリスムである。ブルトンによればシュルレアリスムの発展、拡大、応用が求められるわけであるから、ナジャの生活上の問題も含めて、シュルレアリスムと関連付けることによって、ナジャの問題の解決の可能性が出てくると考えられる。

従ってここにおいてすべきことは、ナジャにおいてナジャ全体を決定している特定の要素を分離抽出することである。この場合我々は一種奇妙な事態に至る。本質を問題にするとすると結局わけがわからなくなってしまうため、ナジャという名前が何を指示するのかを問うことになるのだが、例えばレオナルド・ダ・ヴィンチの『モナリザの微笑み』については、テレビや画集などで見てよく知っているのであるが、本物の絵をルーヴル美術館で見た時、意外な程小さいという事実に気付くはずだ。つまり本来指し示す対象であるにも拘らず、自分の持ってい

た印象とは異なるのだ。

別の例を挙げるなら、信号の青であって、最近では本当に青色になっているようだが、以前は実質的には緑色だった。それを青としてきたわけで、最初にこれは青だとして指し示されると、本当は緑であって青だということになるのだ。このように最初に結び付いた名前と属性というか意味内容があり、後になって本当はこうだったと別のことを示されても、結び付きはそう簡単には崩れない。

これをナジャに当てはめて考えてみるならば、ナジャはちょっと風変わりではあるが、シュルレアリスム的な女性であって、何故そうなるかという、ブルトンがそのように提示したからである。ここで同語反復的な現象が起きるのであって、ナジャはナジャと呼ばれる人物であるというものだ。これこそラカンの言うシニフィエなきシニフィアンということである。つまり意味内容が宙吊りになっているのである。

そのためナジャが実はシュルレアリスム精神の具現化でも何でもなくて、ただの街の女にすぎなかった、それが事実であったとしてもナジャについての同一性は保証されたままである。ナジャ的ではない要素は無視され、いかにもナジャ的であるものを発見すれば、やはりナジャはナジャだということになる。ナジャとは誰かに対する考えられる唯一の答えは、ナジャはナジャであるというもので、仮にもっともらしくシュルレアリスム精神の具現化というそう離れてもない答えを用意したところで、万全の答えというわけにはいかず、何か大事なものが抜け落ちているように思われる。

そしてこれこそラカンの言う対象 a であって、掴みどころのない何かなのである。テキストに即してナジャの属性と思われるものを次々に挙げて、それを一つにまとめたとしても、それがナジャだということにはならない。そうではなくて、事を反転させてナジャが一風変わった存在であるのは、それはナジャだからだと言って初めてナジャの同一性が獲得されるのである。

ここであってナジャは一連の属性を指し示すだけではなく、それ以上の何かを指し示しているのである。このナジャの中であってナジャ以上のものとは対象 a であるのだが、ブルトンはこの対象 a を捉え、シュルレアリスムとして明らかにできるように試みたのである。従ってブルトンが目指すのは、ナジャの中であってナジャ以上のものであり、たまたまナジャという名前を得た偶然性と、ナジャが同一性を獲得することを可能ならしめる要素との繋がりである。それはナジャの外見でも風変わりな性格でもなく、言葉との関わり方である。

つまりブルトンが『シュルレアリスム宣言』においてシュルレアリスム的であると表現されているものが、まさにナジャ自身によって実践されているのだ。このことによって通常なら理解不能として捉えられたことが意味を獲得し、了解可能となったのである。もっともナジャの話す言葉は何か意味があるとか欲望の裏付けがあるというものではないので、要するにナジャが口にする言葉は偶然的なものであるから、それらの言葉がある種の統一を獲得するためにはある一つのシニフィアンを媒介とすること、そのシニフィアンを指し示すことしかないのである。このナジャの言葉の統一と同一性を確保するのは、現実にある対象ではない。従って言葉によって指示されるものではない。

逆にあるシニフィアンを指し示すことによって、これらの言葉に統一と同一性を与えること

になるのだ。現実には常に象徴化される、つまり言葉として捉えられるようになるということだが、それをどう感じるかは象徴化の様態による。何故なら現実界の中であって、これとして記されていないものが象徴化される時、つまりこれといった指示物を持たない、シニフィエなきシニフィアンによって、ラカンが言うように意味の統一が与えられるということである。

ナジャについて我々はよくわかっているわけではなく、むしろブルトンと同様によくわからないというのが真実であるが、それにも拘らずナジャという言葉によって引き起こされる意味の統一というものがあり、ナジャ的であるかないかの判断も可能になる。ナジャはナジャであるという同語反復が成立するところとなるのだ。

第十章 ナジャの声における現前の形而上学

デリダはプラトン以降の西洋哲学史を支配してきた現前の形而上学を批判するのだが、一方で何故ここまで現前の形而上学が支配的であったのかについて考えると、全く理由がないわけではない。例えば砂漠の真ん中でのどが渇いて仕方がないという時、目の前に水が用意されれば、それはかなりの価値あるものに違いない。また資金繰りで困っている事業主に対して、目の前に大金を置き、返すのはいつでもいい、自由に使ったらいいということになると、価格をはるかに越えた価値がある。

デリダはパロールとエクリチュールにも言及していて、話し言葉の方が書き言葉よりも現前的であって、主体の真意が伝わりやすいという指摘をしている。話す方が書くよりも本人の心情が手に取るようにわかるといっても、嘘をつくことだってあるだろうと我々は思うのだが、デリダが西洋の音声中心主義を脱構築するにあたって主張しているのは、現前の形而上学において話し手が直接自分の話しているのを聞く、つまり自己現前を可能にしているのが声であるというのは錯覚であるということだ。確かに自分が話しているのを聞くと、そこに自分が現前しているという気になるが、それは決して丸ごとの自分ではなくて、あくまで身体の一部にすぎないのだ。

ここにおいて、「ナジャの物語」の最後を想起するは簡単だ。ブルトンはナジャの不在を示すのに、ナジャの声が聞こえないと訴えるのだ。ここにおいて自己の内面と声として出されたものは一致するののかという問題がある。そもそもデリダはエクリチュールとは既に書かれたものであって、その元となるものを原エクリチュールとして提示したのであるが、例えば大事なことについて正式な決定事項を公表しなければならない時、既に書かれたものを読むということがあるが、それは言うべきことを忘れてはいけないとか、間違ったことを言うてはいけないからという配慮の下になされると考えられるのであるが、口頭では予想外の本当のことを言うてしまう危険があるからである。その意味で、デリダがパロールの方がエクリチュールよりも上に位置すると考えたのは理解できる。確立した秩序を脅かすことなく書かれた言葉に従属させるために、エクリチュールによって固定しなければならないのだ。

声を持つ危険性についてはフロイトの言う言い間違いがあって、そこには言った本人の欲望が吐露されていると考えられることになる。声の剰余について問題にするなら、例えば長らく日本で放映されていたアメリカのテレビ映画のシリーズにおいて、我々は吹き替えでなじんで

きたし、主人公の人となりとその声から推測していたのであるが、ある時実際の俳優の声を聞いてあまりの違いに驚いたことがある。

この吹き替えの問題を更に顕著にしたのがアニメであって、もともとそこには映像だけしかなく、声は不在であるのだ。つまりそこにはもともと失われているものを、実際の声を入れることによって失われたものを回復しようとする試みである。

声とは内面の表現であり、あってしかるべきところにそれがないとそれを回復すべく求められる媒体である。我々があるものを口にする時、その言葉そのものと、それを口に出して言った声と、そして最後に指し示された物それ自体の距離はどうあるのだろう。ヘーゲルにおいては、言葉と物とを隔てる溝は既に制度化されているが、そのものを口にした声は言葉と物のどちらにより近いのだろう。ヘーゲルは言葉と声とを同一視しているからここでは参考にならないが、ある時は言葉そのものに近く、ある時は物それ自体に近いということになるだろう。何かの事態に遭遇してそれを思わず口にした時、それはむしろ事態そのものであるとさえ言えるだろう。

ここにおいて我々は、ブルトンがナジャの声をどのように捉えていたかに注目しなければならない。ブルトンは10月12日以降日記形式での記述をやめ、最初のうちは若干回顧的な形でナジャとの思い出を語るのであるが、そこにあるのは次の記述である。「数日間、私の前で発せられるか私の目の前で彼女によって一気に書かれるかした、いくつかの言葉私が彼女の声の調子を最もよく思い出しその響きが私の中で非常に大きくあり続ける言葉しか、私は最早思い出したいとは思わないのだ。」(PI p.719)

このナジャの声を聞くのはあるいは聞こえないとすることができるのはブルトンであって、この声が向けられている先はブルトンになると考えるのが標準的な答えというものだろう。しかし他の人々には聞こえない声を、わざわざ取り上げて言及するというのはどこか奇妙なものではないか。ラカンなら大文字の他者もしくは神を持ち出してくるだろう。というのも、ブルトンが大文字の他者に理解させようとしているのは、最早ナジャは不在であるという事実である。ここにあるのは、フロイトが例として提示した自分が死んでいることを知らなかった父親の夢と同じ理屈である。父親にもう死んでいるのだということを理解させるのと同様に、死んではないが、最早ブルトンにとってはナジャは不在であるということを知らしめる意味があるのだ。

ブルトンはナジャの不在を嘆き悲しんでいるのではなく、ナジャの気持ちをなだめ無害化しようとする。大文字の他者がナジャの不在を確実なものにしようとしているのだ。ブルトンが大文字の他者場合によっては神と結び付いていると考えるなら、ナジャが自分のことをこれ以上苦しめることがないよう思い出として働くことを画策するのだ。過去の思い出として提示することで、大文字の他者にナジャの不在を認識させるのである。

このようなナジャの声は、ひとたび大文字の他者によって認識されてしまえば最早なかったことにはできない。ブルトンの人生を支えるものとして、常に必要な存在となるのである。そのためブルトンはナジャと別れることを決意した時に、ナジャの声が高揚し続けるということになるのだ。ナジャの声とは『ナジャ』のテキストとして書かれたものに付随するものなのだ。

テキストに効力を与えるのはこの声なのである。この声の支えがなければ、『ナジャ』のテキストはただの書き物にすぎないのである。つまり象徴的次元にある言葉の羅列を、我々にとってまさにそこにある想像の対象として認識するためには、声の介入が必要だということである。

しかしブルトンにとってその声の介入も煩わしいということになれば、決定的なことは、ナジャの声を聞こえなくさせてしまうことである。つまりブルトンとしては聞こうとしているのだが、何らかの事情があって聞こえない。もちろんブルトンの器官的問題ということではないということなのである。『ナジャ』のテキストの内部に留まる限り、ナジャの不在は考えられないが、一旦テキストの外部に出るということを考えるならば、その前提は崩れてしまう。

つまりブルトンが「ナジャの物語」の後で、訳のわからない思いを繰り返すに至るのも、とりあえずは「ナジャの物語」というテキストの外部に出る必要があったためなのだ。そのありえない前提に立つためには、ナジャの不在という形を取らざるを得ない。この幻想的とも言うべきナジャの不在、今まで存在していた人が急にいなくなってしまうというのだから、単なる事実関係では処理できないということで、この幻想的記述が空白を埋めるのに必要であったのだ。

事実のみを忠実に再現しているとする『ナジャ』のテキストがこの幻想的部分を必要とするのは、このことによってナジャの不在は事実としてなら奇妙なこととして捉えられるその空白を見えなくさせ、『ナジャ』が一冊の書物として成立するためである。かくしてナジャの声は、ブルトンとの対話によってテキストに貢献するだけでなく、テキストが完成されることにも関わってくる。ここにおいて『ナジャ』のテキストにおいては、現在と不在とが分かちがたく絡み合っている。この場合、ナジャの声はナジャの現前を指し示すと同時に、既に指摘したようにナジャの不在をも指し示すことになる。ここにおいてナジャという同一人物による声が、正反対の様相を呈しているということである。様相が異なるだけで、客体的存在として同一のものである。

第十一章 ナジャは誰でもいいというわけではない

ブルトンにとっての原点は「新精神」に出てくる謎の女性であって、第一義的にはその女性と再会することであり、次善のものとしては謎の女性の系列にある女性ということになるだろう。初めにナジャありきではないのだ。このことを裏付けるのに、ブルトンがナジャを乗せてドライブした時の記述を持ち出してくることができる。ブルトンはヴェルサイユからパリに向けて車を走らせていたのだが、同乗していたのがナジャである。この時ブルトンは二人がお互いにとって永遠の存在であると感じさせてくれた体験について話しているのだが、「愛についてのある共通の認識」(PI p.748)とまで言いながら、同乗する女性について「私の隣の一人の女性、それはナジャだったが、他のあらゆる女性、そうじゃないか、そしてある別の女性 (下線原文)でさえあり得ただろう」(PI p.748)と書くのである。

ナジャとは代替可能な女性なのか。また第三部において当時の愛人であったという女性について、「故意にそうするのではなく、君は私の予感にあるいくつかの顔と同時に、私にとって最も慣れ親しんだ姿に代わった。ナジャはこれらの顔に属していたが、君が私に彼女を隠してしまったのは完璧である。」(PI pp.751-752)

こうなると謎の女性が初めにあって、後はその模倣集団で、ナジャはその一人ということになるのか。ここで決定的になるのが、ブルトンがナジャをまさにシュルレアリスム精神の具現化にしようとしていた謎の女性の模倣が、実はナジャが「新精神」の謎の女性とは違った謎の女性であると感じ、ブルトンは模倣の模倣を作ろうとしていたことに気付く時なのである。

仮にナジャが数ある女性たちの一人にすぎないとして、ブルトンは何故満足することができないのかということから、女性たちの差について分析し出すだろう。そしてその上で出てくるのが大文字の女性なのである。ラカンによればそのような女性は存在しないのであるから、ブルトンはある女性から別の女性へと永遠に渡り歩く運命にとらわれることになる。

ここにおいて事態は逆転して、ブルトンは謎の女性を探し求めるのではなく、むしろその過程を書き記すこと、それもできるだけ長く詳細にということ、いつまでも書き続けることができるようになるのが目的となるのだ。その一つの成果が『ナジャ』のテキストであって、これに類するものは他に見当たらない。ここから出てくる結論は明白であって、大文字の女性、つまりブルトンにとっては謎の女性は実際には存在しない以上、ブルトンは終わりなき記録を運命付けられているのだ。

しかしながらこれだけでは、ナジャが登場する必然性は何かという問いを棚上げにしたままである。ナジャは一風変わっているとはいえただの街の女であり、彼女の存在が社会の秩序にとって深刻な脅威を与えるということはない。ただ精神的に不安定なところがあり、それは社会にとって脅威をもたらすのではなく、彼女の生活それ自体を脅かすのである。ナジャは社会にとって寄生者であり、そのような者として社会に張り付いている。このような状況にあってブルトンだけがナジャを生活面で支援するとともに、シュルレアリスム精神の具現化された存在として大きく転換させたのだ。ブルトンにとってナジャは単なる快楽を享受することではなく、シュルレアリスムの問題と関わるのである。カントの用語を用いれば、快楽原則を越えた衝動にブルトンは駆られていたということなのだ。要するに、ブルトンがシュルリアリストであったということから、ナジャはその相関物になったというわけである。

しかしながらこの事態はある種の不可能性によって介在させられていて、ナジャ自身が実際にシュルリアリストとして存在することはあり得ないからだ。ブルトンはシュルリアリストという立場故に、単に芸術の領域に留まることなく、全ての領域においてシュルレアリスムを発揮すべく、街の中においてもシュルレアリスムを実行したということだ。まさにこの故に、ナジャの運命は決定的なものとなるのである。どのように対応していいかわからずに精神に異常をきたしたナジャは、ブルトンの前から、社会から消え去ったわけである。

ナジャという実在が消え去ってしまえば、残ったのはナジャの名前やナジャについての思い出であって、それをナジャという概念として捉えることができるだろう。ここにおいてヘーゲルを持ち出してくるなら、ヘーゲルの言っている「バラは赤い」を否定判断として捉えるなら、「バラは赤くない」であるが、このことはバラは青かもしれないし黄色かもしれないということ、何らかの色を持っているということになる。これが色の場合問題はないのであるが、「バラは象ではない」というのは確かにもっともなのであるが、これを肯定にして「バラは象である」とは言えない。結局のところ「バラはバラである」という同語反復しか成立し得なくなっ

まう。

ここにあるのは指示物とそれを指し示す言葉の一致という至極当然な関係なのであるが、ラカンが『第一セミナー』において、実は言葉というのは指示物なしでも成立するということから、言葉は指示物の象徴的殺害を含んでいるという事実を例証している。確かに何かを伝えるのに、物それ自体を目の前に持ってこなければ話にならないというのであれば煩わしくて仕方がないのであるが、言葉はその点その指示物が目の前になくても双方の諒解事項として成立してしまう。

これが更に進むと、その指示物自体が存在していなくても、言葉は有効に機能するということなのだ。そのためラカンはヘーゲルを参照して、というかまさに引用する形で、概念とは物が全くそこに存在していないのに、そこに物を存在させるものだということを指摘している。

このことは「本当のナジャとは誰なのか」というブルトンの問いに、解決の糸口を見出してくれる。つまり「ナジャはナジャである」という同語反復に行き着く。ただ、主語それ自体によってしか述語化されないということである。何故なら、ブルトンはナジャについて何も言うことができない、何の属性も与えることができないからである。

従ってここから導き出されるのは、主語であるナジャを説明するのに、「バラはバラである」において主語のバラを説明するのにまさに実際に存在している指示物のバラを持ってこなければならなかったように、実体的存在としてのナジャを述語として持ってこざるを得ないということである。この述語としてのナジャは、ブルトンがナジャについて靈感あるスフィンクスが墮落した街の女かという様々な個性性を包摂するものなのである。様々に変化し得る主語のナジャを捉え得るのは、それ自体で全てを受け入れてしまう述語の下にある現存在なのである。

ここで鏡の比喩を持ち出すなら、鏡に写し出されるだけの偶然的な現実性を持ったもので、普遍的本質といった反省的次元を問題にしているわけではないのだ。この述語としてのナジャを受け止めるのが主語としてのナジャであって、それまではシュルレアリスム精神の具現化だと思っていたナジャが、ひょっとしたらただの街の中でも最低の存在かもしれないと思われるようになった時、主語たるナジャはそれに徐々に順応していくのである。つまり靈感のある女性かもしれないし、墮落した街の女であるかもしれないナジャとは、一体誰なのかという問いに対して、そのいずれかを答えるのではなく、まさに存在するナジャを述語として指し示すということである。

「ナジャはナジャではない」ということになれば、それではナジャではなくエレーヌなのかレナなのかということ、別の女性の名前を持ってくる他ないのであるが、本質的なことについて全くわからず、「ナジャはナジャである」としか答えようがない状況において、ナジャ以外の女性を持って来ることは、形式的次元においても間違っているし、本質的にもあり得ないことであり、ナジャが存在していなくても正しくないのである。

終章

プルーストが『失われた時を求めて』の第一篇「スワン家の方へ」で、プルーストにとって主題的な事柄について、特に第一部の「コンプレ」や第二部の「スワンの恋」で書いてしま

ったと思われるにも拘らず、敢えて第三部「様々な土地の名・名前というもの」を書き加えることによって、この第一篇を完成させたのは、記憶の対象となっている場所が語られるにしても、オデット＝スワン夫人という唯一の名前が登場するか否かによって、その場所自体が大きく変わってしまうことを明らかにしておく必要があったためだ。

この考えに影響を受けたかどうかはわからないにしても、ブルトンが「ナジャの物語」として完結しているかに見える『ナジャ』のテキストに、敢えて第三部を書き加えることにしたのは、ナジャの存在があるかどうかによって、ナジャの名でもって語られるパリの街は一変してしまうということを言いたいためであり、これを逆に言えば、ブルトンの中では未だにナジャが現存在していることを物語っているのである。

仮に第二部の「ナジャの物語」で『ナジャ』が完結していれば、ナジャとの出会いは一回性のものであり、またナジャが消え去った後は、最早忘却の彼方にあるということになってしまう。「ナジャの物語」の最後においてナジャが消え去ってしまった後、それでもナジャを何らかの形で生きながらえさせておく必要があったわけであるし、ブルトン自身それを望んでいたのだ。

ここにおいて書かれるべきことが起こるのは、まさにその時ではなくて、時間の経過とともにその出来事に気付く時であり、その間はまさに「失われた時」なのである。既に見たように、これらの出来事において全ては関係主義的であるように思われる。ところがそれではナジャはナジャである必要はなく、ナジャがナジャであるためには実体的なものを必要とするというのが我々の結論である。

例えば、廣松渉は実体主義は間違いで、関係主義こそが正しいのだということを明らかにするために、次のような事例を示している。ネオンのような点滅する電球があって、その配置は大きく✖を描くようになっている。今その電球が点滅しているのを見ると、左上の電球は次々と右下へと移行し、左下の電球は右上に移行しているように見える。ところがその✖が交差している所があり、もちろんそれぞれの電球が直線的に進入するなら、交差した点の後もそれまでの動きを変えずに光は移行していつているように見えるが、仮に交差した点で、今度は別方向に進路を変えたとしたらどうか。つまり左上から移ってきた光は、交差した後、右上へと進み、左下から進んできた光は、交差した後、右下へと進むというわけだ。もちろんこれは仮の話であって、実際はどうなっているかわからない。つまり電球の点滅による光の移行は、実体主義的なものではなく関係主義的なものだと主張するのである⁶⁾。

確かに点滅する電球を見ていて、それがどのように進んでいくかについてはよくわからないというところである。しかしこれは奇妙な論理であって、そこにあるのは電球の点滅だけであり、光がどのように進んでいるように見えるかについては見る側の錯覚であり、我々が勝手に作り上げた物語なのである。

同様に、『ナジャ』においてブルトンとナジャの出会いが大文字の他者によって語られるかのように話すには、かなりの物語を用意しなければならないだろう。しかしそのことはそれにも拘らず、精神分析によってブルトンの欲望を把握するには有効な方法である。この方法が意味するのは、ブルトン自身が「序言」で述べていることとは逆に、現実を直にあるがままに記述するのではなく、物語の流れに沿うように記述することに他ならない。

そもそも我々が何事かを相手に伝えようとする時に一つの物語として提示することが多く、その方がわかりやすいということにもなるのだが、その際その物語に合致しない細かい出来事は無視される。この場合完全に証明することは難しい目的論の下、現実と物語とを合致させているのである。

シュルレアリスムはブルトンによる現実否定の思想そのものである。ブルトンが現実否定を掲げながら、自分の主張を伝えるのに現実のイメージを必要とするのは、まさに否定し乗り越えるべき対象が前提となっているからである。ただブルトンに付いて回る問題は次のことである。つまり現実否定とは言いながらも、本当にどこまで否定できるのかということである。そもそも現実とは何で、どこからどこまでを指すのかという問題がある。確かに現実とは何かについて我々はそのイメージでもって理解していて、少し理論的に接近して考えるなら、複雑な外的世界との関係と処理と想定された枠組みとそこへの個人的関与から導き出される一つの仮説である。

もちろん我々は現実の外部にいるわけでもなく、あくまで現実の一部としてあるのだ。そしてこのような捉え方が、既に示した動いているように見える電球の光の進行方向に伴う錯覚であって、大きく言えば一つの物語として設定していることと同じではないとどうして言えるのか。つまり我々の立てている仮説とは錯覚であり、一つの物語にすぎないということである。

それならば我々が求めるべきは、ただ単に点滅しているだけの電球の光なのだ。ここにおいてブルトンが『ナジャ』の最後で無意識への依存を強調する時、「私の眼の中にあると私が知っている光る点」(PI p.749)と表現しているのは示唆的である。

ここにおいて我々は、弁証法的転換の考え方を適用する必要に駆られる。つまり我々がこれまで分析してきたことは、物事を関係主義的に捉えることであったのだが、動いている電球の光に伴う錯覚のように、意図的ではないにしても、見るべき対象を捉えずに、そこから紡ぎ出される物語を重要視していたのだから、電球の点滅そのものを捉える実体主義的方法への移行である。カントの物自体も概念としては設定されながらも、物自体は存在しないということになるし、ラカンの言う大文字の他者も理論的にはその存在が導き出されるのであるが、結局のところ大文字の他者は存在しないと断言することになる。

自己とか主体とか実体的にはないとされるものを本当に剝奪してしまった我々は、ただの自動機械になってしまうだろう。つまり実体主義的に物事を捉えることの困難というものがすぐさま出現するわけであるが、それではただ単に点滅するだけの電球の光とは我々にとって何を意味するのか。我々が自由であると感じるのは我々を取り巻く物事の原因と結果を誤認しているにすぎないとしたらどうだろう。つまり錯覚もまた我々に必要な要素であったということになる。しかしだからといって錯覚は結局のところ誤りだとして退けることはできない。電球の点滅のみを捉えるような形でこの現実を捉えるなら、存在の実体的秩序、完全に構成された実体的な存在の連鎖ということになる。

この意味で『ナジャ』に見出すことのできるものはナジャという存在である。ここには主体としての場所は存在しない。そのため「私は誰か」といったような主体的次元での問いに対する答えを求めようとするれば、この実体的存在を誤認し、それとの相互依存的な関係を築き上げ

るしかない。主体の地位を話し説明するためには、現実にある存在だけではなく、そこに意味を見出すようにしなければならない。もちろんそこにあるのは存在だけであって、意味を求めると自体、つまり意味が欠けていると感じること自体が錯覚であるという事実には自覚的でないといけない。電球が点滅しているだけで、電球の光がある方向に進行しているのではないということを知った上で、それでも電球の光は動いているように見えるというのが正解である。もし電球は動いていると主張するならば、現実的なものと象徴的なものの関係を把握する試みは失敗を余儀なくされるだろう。

注

- 1) 引用文の後に示されている略記号は以下の文献を表わしている。イタリック体は下線で表記した。尚、引用文は全て筆者の訳による。
(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Pléiade, Gallimard, 1988
(AB) Henri BÉHAR, *André BRETON le grand indésirable*, Fayard, 2005
(CS) Marcel PROUST, *Du côté de chez Swann*, folio classique, Gallimard, 1987
尚、ラカンの理解にあたっては Slavoj Žižek の著作を多数参照した。
- 2) エセル・リナ・ホワイト原作、アルフレッド・ヒッチコック監督、1938年
- 3) インドロ・モンタネリ原作、ロベルト・ロッセリーニ監督、1959年
- 4) コルタサル原作、ミケランジェロ・アントニオーニ監督、1967年
- 5) これは何も大きな社会的変化でなくても、似たような体験を我々はしている。以前なら、海外旅行に行くためにはトラベラーズチェックを持って行っていたが、昨今ホテルでもトラベラーズチェックを受け取らなくなってしまった。当然の如くそのトラベラーズチェックはただの紙切れ同然となり、ただちに銀行で換金することとなった。
- 6) 正確に言えば、廣松渉自身が独自に出した事例というのではなく、朝永振一郎が量子力学について書いているものから援用しているのである。該当する部分は次の通りである。「ここでもう一度、朝永氏を援用して、素粒子には自己同一性がないという事態を、幾分なりともリアルに表象する一見を供しておこう。「例えば第一図（省略）のような電光ニュースにおいて、A及びBの電球から始まって矢で示したように光点が移動して行ったとしよう。A、Bから出発した二つの光点はCで一度ぶつかり、次に再びわかれてD及びEに行く。さてこの時、それではDにきた光点はもとAにあったのがやって来たのであろうか。それともBにあったのがやって来たのであろうかと問うてみる。ところでこのような質問が何の意味もないものであることは明らかである。従って、二つの光点が板の上を動いている時に、この二つの粒子の各々に名前をつけて区別することは出来ない相談である。（後略）」（朝永振一郎『量子力学的世界像』弘文堂 46-47）

